

東欧行政視察記

佐瀬 哲司
横芝町長

英才教育で育つ人材

東ドイツ民主共和国は、面積が日本の約三十%、人口一千七百万人で、共産圏の国ではソ連について第二位の鉱工業生産高をほこり、農業も盛んでとりわけ畜産が盛んである。

人口増加を図るため、結婚すると国が優先的に住宅への入居を認めたり、子供が二人生まれると一年間育児休暇を与え、給料の六十%を支給するなど、奨励をしているが、二十、二十一といった若すぎる結婚年齢や団地住まいによる生活競争のため離婚する者も多く、離婚率は、アメリカ、ソ連について高いとのことである。

伝統文化を

残す町並

首都東ベルリンは、広々とした近代的なただすまいの中にも歴史の重さを感じさせる都市である。菩提樹の並木が緑の枝を広げる美しい通りは、マルクス、エンゲルス広場から始まり、今日のベルリンの象徴ともいえるものである。戦前から有名なこの大通りは、戦災を被った歴史的な建物を昔の

ままに次々と復興する一方、新しい都市計画に基づく近代的な建物も建てられており、伝統文化を大切にしながら発展していくこの国の姿をみる事ができる。

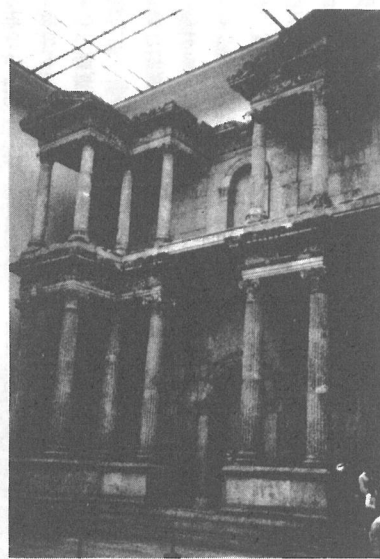
人口は百二十万人で、古代から学問と美術、音楽、演劇等の芸術文化の中心地で、ドイツの分裂後に東西ドイツに分かれた。

十年の義務教育

最初に市内の高層住宅団地にある中学校を視察した。日曜日のため生徒はいなかったが、役人と校長の二人で説明してくれた。二階建ての小さな校舎で、運動場も狭かった。

この国の義務教育は日本の制度より一年多い十年で、幼稚園から大学まで教育費用は一切無料である。また、戦前の教員はナチス党員であったとのこと、全員罷免したそうである。

この中学校は、一クラス二十二人編成で十六クラスあり、成績は一〜五に分類され、五は落第させるとのことであった。



↑ 建物の一部と見まがえるほど大きなペルモガモン博物館の展示品

ソ連語は義務教育となっており、八年生（日本の中学二年）になると試験をして、本人の能力と成績に応じて、数学、語学、体育、音楽の専門中学校へと分類していくとのことである。

また十年生の卒業時にさらに試験を実施し、合格すると二年間大学予備校へと進学するシステムになっており、この二年間の内に現場の工場等で実習をしていくとのことである。

この国も、同じ共産圏のソ連や中国同様にエリート中心教育になっており、オリンピックなどで陸上や体操が非常に強い理由が理解できた。

その他科学の方でも英才教育が積極的に取り入れられており、共産圏のこの勢いに追い抜かれ、日本の教育はこれで大丈夫だろうかと思ふと一抹の不安を抱かせた。

今後我々もこの共産諸国の教育を、大いに研究すべきだと思ふ。

ペルモガモン博物館

帰りにブランテンブルグ凱旋門を車中より見学、青銅の馬車に乗った勝利の女神像がベルリン市街を見下ろしており、平和のシンボルとなっていた。門の背後には東西ベルリンの壁、国境守備隊の衛兵の姿が見られた。

次の見学地ペルモガモン博物館へと移動した。この建物は一九〇九年から三十年をかけて建てられたもので、古代の建築様式のコレクションなどの重要な展示品があり、驚くほど大きい有名な彫刻像もみられました。

二日間にわたり我々を案内してくれたガイドと別れを告げ、三十

分くらいで西ベルリンの国境線に到着した。検問は非常に厳しく、カメラ類は一切カバンの中へ入れるようにとの注意があった。またバスの下側は、鏡の付いた器具で検査をしていた。

緊張する国境線

東西の国境線は、四メートルほどのコンクリート壁で仕切っており、刑務所と同じである。電流の通ったバリケードも張られ、境は五〜六メートルの道路一本で、東西の建物は声をかければ話のできるほど近い距離にあった。

我々の乗ったバスは東ドイツのもので、運転士も東ドイツ人であったが、そのまま西ドイツに乗り入れられるように、双方で協定が交されており、東ドイツでは独身者は逃亡される恐れがあるので、運転士は必ず妻子のある者でなければ許可しないとのことである。

同じドイツ人でありながら、東と西に別れた民族は、朝鮮と韓国、台湾と中国と、世界にもいくつかの同じ運命を背負った国が存在するが、悲劇である。

我々の日本は敗戦はしたが、国が別々にならなかっただけ幸福だったと感じた。